

ゆめじゅうや 夢十夜

レベル初級
しよちゆうきゆう

【原作】夏目漱石
げんさく なつめそうせき

【簡約】佐藤もみ・中野沙耶・藤澤舞
かみやく さとう なかのさや ふじさわまい

【挿絵】藤澤舞
さしえ ふじさわまい



こんな夢を見ました。

顔を上に向けて寝た女が、静かな声で「もう死にます。」と言いました。私は、その近くに座って、女を見ていました。

女は長い髪の上に美しい顔に乗せています。

女は、頬も唇も赤い色をしていて、元気そうなので、死ぬとは思えません。

しかし、女は静かな声で「もう死にます。」とはっきりと言いました。

私も、たしかに女が死ぬと思いました。

だから「そうですか。もう死ぬのですか。」と寝ている女の目を見て聞きました。

「死にますよ。」と言いながら、女は目を開けました。

大きく、美しい黒い目でした。

私はその黒くてきれいな目を見ながら、これでも死ぬのかと思いました。

それで、もう一回、女の近くで「死にませんよね。大丈夫ですよね。」と聞きました。

すると女は、眠たそうにしながら、静かな声で「でも死ぬんですよ。仕方がないわ。」と言

ました。

「じゃあ、私の顔が見えますか。」と一生懸命に聞くと、女は「見えますよ。ほら、私の目にあなたがいるでしょう?」と言って笑いました。

おんな ほんとう
女は本当に死ぬのでしょうか。

おんな
しばらくして、女がまたこう言いました。

し わたし はか つく おお しんじゅがい あな ほ
「死んだら、私の墓を作ってください。大きな真珠貝で穴を掘って。

そら お ほし はか お
そうして、空から落ちてくる星を、その墓に置いてください。そして、

はか となり ま あ き
墓の隣で待っていてください。また会いに来ますから。」

わたし あ き
私は「いつ会いに来ますか。」と聞きました。

あさ よる
「朝になるでしょう。それから夜になるでしょう。それからまた朝になるでしょう。そうして

よる あか たいよう ひがし にし ひがし にし お あいだ
また夜になるでしょう。赤い太陽が東から西へ、東から西へと落ちていく間、



あなたは待^まっていられますか」

わたしは静^{しず}かに「はい。」と言^いいました。

おんなはさつきよりも少^{すこ}し大^{おお}きな声^{こゑ}で「百年待^{ひやくねん}っていてください。」と言^いいました。

「百年、私の墓^{はか}の隣^{となり}に座^{すわ}って待^まっていてください。きつと会^あいに来^きますから。」

わたしは「待^まっています。」と答^{こた}えました。

すると、女^{おんな}の黒^{くろ}い目^めの中^{なか}に見^みえた私^{わたし}が、だんだん見^みえなくな^なっていきま^ました。

静^{しず}かに水^{みず}が動^{うご}いて私^{わたし}を消^けしたと思^{おも}ったら、女^{おんな}は目^めを閉^とじま^ました。

その目^めから、涙^{なみだ}が流^{なが}れてきま^ました。

もう死しんでいましました。



わたし
私はそれから庭へ行つて、真珠貝で穴を掘りました。

つち ほ
土を掘ると、いつも真珠貝の裏に月の光が差して

きれいでした。

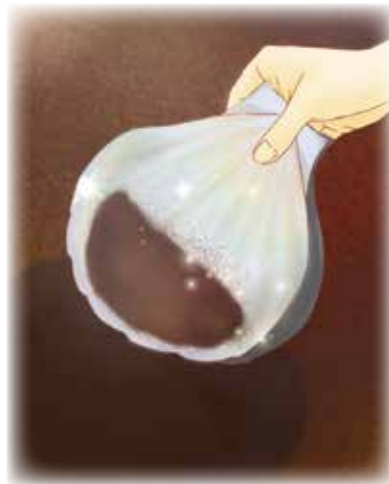
つち にお
土の匂いもしました。

あな ほ
穴はしばらくして掘れました。

おんな なか い
女をその中に入れました。

やわ つち うえ
そうして柔らかい土を、上からそつと掛けました。

つち か
土を掛けると、いつも真珠貝の裏に月の光が差しました。



それから、落ちた星を拾って、墓の上にのせました。

星は丸い形でした。

大空を落ちている間に、丸くなったのでしよう。

星を土の上に置くと、私の心と手が少し暖かくなりました。

私は墓の隣に座りました。

これから百年、こうして待つのだと思しながら、墓を見していました。

すると、女が言ったとおり太陽が東から出ました。

大きな赤い太陽でした。

それが、また女おんなの言いったとおり、西にしへ落おちました。

赤あかいまま落おちていきました。

これで一日いちにち経ちました。

しばらくするとまた、赤あかい太陽たいようがのぼってきました。

そうして、静しずかに落おちていきました。

これで二日ふつか経ちました。

何なん日も経ちました。

何なん回かい見たみのか、分わからないくらい、赤あかい太陽たいようが頭あたまの



上うえを通とおっていききました。

それでも百年ひゃくねんはまだ来きません。

私わたしは、女おんなに嘘うそを言いわれたのかもしれないと思おもい始めはじめました。

すると、置おいた星ほしの下したから、緑みどりの茎くきが私わたしの方ほうに向むかってきます。

見みているとすぐながに長ながくなって、ちよわたしうど私わたしの首くびより下したくくらいまで止とまりました。

私わたしのほうを見みて、花はなが咲さきました。

白しろい百ゆり合はなが鼻なきの先つよで、とてにおも強つよく匂においました。

そこへ上うえから、露つゆが落おちたので、花はなはそれおもが重おもくて動うごきました。

わたし くび まえ だ つゆ お しろ ゆり
私は首を前に出して、露の落ちる白い百合にキスをしました。

あか はじ そら み ほし ひと ひか
明るくなり始めた空を見ると、星が一つ光っていました。

ひゃくねん き おんな ひゃくねんた ゆり わたし あ き
百年はもう来ていました。女は百年経って、百合になって私に会いに来てくれました。



やさしい日本語で読む日本文学
『夢十夜』『指』

2023年3月1日発行

発行 宮城学院女子大学 学芸学部 日本文学科

印刷 株式会社 フロット

許可なしに転載・複製することを禁じます。